(4) 静岡県の子どもに紹介したい作品の例（郷土ゆかりの文学　資料）

【資料について】

・主として古典文学作品を採録した。近現代の作品については、前項の参考資料を参照する。

・登場する地名や作者・執筆場所が静岡に関わる作品・又は作品の一部分を、ジャンルごとに並べて掲載した。

・四角囲みは、作者・作品ごとの概要を記した。

・☆印で、その作品に関連のある静岡県の地域（伊豆・東部・中部・西部）を記した。

・作品中の仮名遣い・漢字のルビは出典のままだが、一部の旧字体は新字体に改めた。

・作品以外の旧字体は新字体に改めた。また、ルビは特に難解な読みや特殊な漢字に施した。

【資料作品一覧】

ジャンル	作品	作者	地区
史書	古事記		中部
物語	竹取物語		東部
物語	伊勢物語		中部
軍記物語	平家物語		東部
軍記物語	曽我物語		伊豆
日記	十六夜日記	阿仏尼	西部
滑稽本	東海道中膝栗毛	十返舎一九	中部
紀行	野ざらし紀行	芭蕉	中・西部
和歌	万葉集（十四首）		伊・東・中・西部
和歌	古今和歌集（二首）		東・西部
和歌	新古今和歌集（九首）		東・中・西部
和歌	金槐和歌集（六首）	源実朝	伊・東・中・西部
俳諧	（三句）	松尾芭蕉	中・西部
近代短歌	歌集「海阪」	北原白秋	中・西部
近代短歌	歌集「渓谷集」	若山牧水	東部
近代俳句	寒山落木	正岡子規	西部
近代俳句	碧梧桐句集	河東碧梧桐	東部
近代俳句	六百句時代　他	高浜虚子	東部

○史書

倭建命（ヤマトタケルノミコト）は日本神話における英雄であり、『古事記』『日本書紀』にその名が見られる。次に挙げたのは、静岡県の地名「焼津」「草薙」の由来となったと言われる、ヤマトタケルが東国平定に向かう途中で苦戦を強いられた場面である。

かれしかして、相武の国に到りましし時に、その国の造、詐りて白ししく、「この野の中に大き沼あり。この沼の中に住める神、いと道速振る神ぞ」ここに、その神を看行はしにその野に入りましき。しかして、その国の造、火をその野に著けき。かれ、欺かれぬと知らして、姨倭比売の命の給ひし嚢の口を解開きて見給へば、火打その裏にあり。ここに、先づその御刀もちて草を苅り撥ひ、その火打もちて火を打ち出でて、向火を著けて焼き退けて、還り出でてみなその国の造等を切り滅し、すなわち火を著けて焼きたまひき。かれ、今に、焼遣といふ。

☆中部地区

＊相武の国…現在の神奈川県、『日本書紀』には駿河の国とある。
焼遣…神奈川県厚木市小野。『日本書紀』では静岡県焼津市。

（『古事記』新潮日本古典集成）

【意味】

こうして、相武の国におつきになった時、そこの国造が、嘘をついて言うには、「この野の中に大きな沼があります。その沼に住んでいる神はたいへん荒々しい神です。」と。

そこで、ヤマトタケルはその神を御覧になりに、その野にお入りになった。すると、国造は、（ヤマトタケルを焼き殺そうと）その野に火を放った。ヤマトタケルは、だまされたとお知りになって、叔母のヤマトヒメノミコトがくださった袋の口をあけて御覧になると、火打ち石がその中に入っていた。そこでヤマトタケルは、まず、持っていた草薙剣で周囲の草をなぎ払い、その火打ち石で火を打ち出して、向い火をつけて（国造がつけた）火を退けて、生還し、国造たちをすべて切り殺し、火をつけて焼いてしまいなさった。その場所を、今焼遣と言う。

○物語（作り物語）

『竹取物語』は日本最古の物語であり、『かぐや姫』の名称で広く親しまれている。ここでは、かぐや姫が月に帰った後、帝が天に一番近い山で不死の薬を焼いたという、富士山伝説の元となる場面を挙げる。

中将、人々引き具して帰り参りて、かぐや姫をえ戦い止めずなりぬること、細々と奏す。薬の壺に御文そへて参らす。拡げて御覧じて、いといたくあはれがらせ給ひて、ものもきこしめさず、御遊びなどもなかりけり。

大臣、上達部を召して、
「いづれの山か天に近き。」
と問はせ給ふに、ある人奏す、
「駿河の国にあるなる山なむ、この都も近く、天も近く侍る。」
と奏す。これを聞かせ給ひて、

逢ふこともなみだに浮かぶわが身には　死なぬ薬もなににかはせむ

かの奉る不死の薬、御文、壺具して、御使に賜はす。御使には、調石笠（つきのいはかさ）といふ人を召して、駿河の国にあんなる山の頂（いただき）に持て着くべきよし、仰せ給ふ。嶺（みね）にてすべきやう教へさせ給ふ。そのよし承（うけたまは）りて、士（つはもの）どもあまた具して、山へ登りけるよりなむ、その山を「富士の山」とは名づけける。

その煙（けぶり）、いまだ雲の中へ立ち昇るとぞ、言ひ伝へたる。

☆東部地区

（『竹取物語』新潮日本古典集成）

【意味】

頭中将（とうのちゅうじょう）は家来たちを引き連れて帰り、かぐや姫を(天人と戦って)引き止めることができなかったことを、こと細かに帝に申し上げる。そして、(かぐや姫から預かった)薬の壺にお手紙を添えて差し上げる。帝は(お手紙を)広げて御覧になって、たいそうお悲しみになり、食事もされず、詩歌管弦のお遊びをすることなどもなかった。

帝が、大臣や上達目をお呼びになり、

「どこの山が天に近いか。」

とお尋ねになると、ある者が申し上げるに

「駿河の国にあるという山が、この都にも近く、天にも近うございます。」と。これをお聞きになり、

かぐや姫と二度と会うこともないので、涙に浮かんでいるような我が身にとって、死なない薬が何の役にたちましょうか、何の役にもたちません

かぐや姫が差し上げた不死の薬に、お手紙と壺を添えて、御使いにお渡しなさる。御使いには調石笠という人をお呼びになって、駿河の国にあるという、山の頂上に持って行くようお命じなさる。そして、山頂ですべきこと(不死の薬、手紙、壺を焼くこと)をお教えなさる。調石笠がことの次第をお引き受けして、兵士たちを多数引き連れて山に登ったことから、その山を「富士(士に富む)の山」と名付けたそうだ。

その煙は、今でも雲の中へ立ち昇っていると言い伝えられている。

＊富士山の名前の由来には、不死の薬を焼いた山「富士(不死)の山」という説もある。

○物語（歌物語）

『伊勢物語』は在原業平（ありわらのなりひら）が主人公とされる歌物語である。和歌を中心に、業平の初冠（ういこうぶり）（男子の成人式）から辞世を詠むまでの一代記となっている。次に挙げたのは、自らにふさわしい場所を求めて都を旅立ち、東国に赴く業平の静岡県での体験を描いた場面である。

ゆきゆきて駿河（するが）の国にいたりぬ。宇津（うつ）の山にいたりて、わが入らむとする道はいと暗う細きに、つたかへでは茂り、もの心ぼそく、すずろなるめを見ることと思ふに、修行者（すぎやうざ）あひたり。

「かかる道はいかでかいまする。」

といふを見れば、見し人なりけり。京に、その人の御もとにとて、ふみ書きてつく。

駿河なる宇津の山辺のうつつにも　夢にも人に逢はぬなりけり

富士の山を見れば、五月（さつき）のつごもりに、雪いとしろう降れり。

時しらぬ山は富士の嶺（ね）　いつとてか鹿（か）の子まだらに雪の降るらむ

その山は、ここにたとへば、比叡の山を二十ばかり重ねあげたらむほどして、なりはしほじりのやうになむありける。

☆中部地区

（『伊勢物語』新潮日本古典集成）

【意味】

旅をどんどん続けて、駿河の国についた。宇津の山について、自分がこれから分け入ろうとする道はとても暗く細い上に、つたやかえでが茂り、何となく心細くて、思いがけなくつらい目にあうことだと思っていると、修行者が来合わせた。

「このような道に、どうしていらっしゃるのですか。」

と言うのを見ると、知っている人であった。都にいらっしゃるあの方の所へと言って、手紙を書いて託す。

駿河にある宇津の山にいる私が、現実にあなたにお会いできないのはもちろんですが、でもお会いできないのは、あなたは私のことを思ってくださっていないのですね

富士山をみると、五月の終わりなのに、雪がとても白く降りつもっている

季節を知らない山は富士山であるよ。今をいつだと思っているのか鹿の子まだらに雪が降り積もっていることよ

その山(富士山)はここ(京都)にたとえると、比叡山を二十くらい重ねあげたほどの高さで、形は塩尻のようであった。

＊塩尻…塩を取るため、海岸に砂を丸く高く積み上げたもの。

○軍記物語

『平家物語』は平家一門の栄華と没落を描いた軍記物語である。源頼朝挙兵の報を受けた平清盛は軍勢を東国に派遣し、両軍は富士川を挟んで対陣する。本文は富士川の合戦の場面である。

大将軍権亮少将維盛、東国の案内者とて、長井の斎藤別当実盛を召して、「やや実盛、なんぢ程の強弓勢兵、八ケ国にいかほどあるぞ」と問ひ給へば、斎藤別当あざわらッて申しけるは、「さ候へば君は実盛を大矢とおぼしめし候か。わづかに十三束こそ仕り候へ。実盛射候者は、八ケ国にいくらも候。大矢と申すぢやうの者の、十五束におとッてひくは候はず。弓のつよさもしたたかなる者五六人してはり候。かかる精兵どもが射候へば、鎧の二三両をもかさねてたやすう射とほし候なり。大名一人と申すは、勢のすくないぢやう、五百騎におとるとは候はず。馬に乗ッつれば、おつる道を知らず。悪所をはすれども、馬を倒さず。いくさは又、親もうたれよ子もうたれよ、死ぬれば乗りこえたたかふ候。西国のいくさと申すは、親うたれぬれば孝養し、忌あけて寄せ、子うたれぬればその思歎に寄せ候はず。兵粮米つきぬれば、春は田つくり、秋はかりをさめて寄せ、夏はあつしといひ、冬はさむしときらひ候。東国にはすべて其儀候はず。甲斐、信濃の源氏共、案内知ッて候。富士のすそより、搦手にやまはり候らん。かう申せば君を臆せさせ参らせんとて申すには候はず。いくさは勢にはよらず、はかり事によるとこそ申しつたへて候へ。実盛今度のいくさに命いきて、ふたたび都へ参るべしとも覚え候はず」と申しければ、平家の兵どもこれをきいて、みなふるひわななきあへり。

さる程に十月廿三日にもなりぬ。あすは源平富士河にて矢合とさだめたりけるに、夜に入ッて平家の方より、源氏の陣を見わたせば、伊豆、駿河の人民百姓等がいくさにおそれて、或は野に入り山にかくれ、或は舟にとり乗ッて、海河にうかび、いとなみの火の見えけるを、平家の兵ども、「あなおびただしの源氏の陣の遠火のおほさよ。げにもまことに野も山も、海も河も、みなかたきでありけり。いかがせん」とぞあわてける。

その夜の夜半ばかり、富士の沼に、いくらもむれゐたりける水鳥どもが、なににかおどろきたりけん。ただ一度にばッと立ちける羽音の、大風いかづちなンどの様にきこえければ、平家の兵ども、「すはや源氏の大勢の寄するは。斎藤別当が申しつる様に、さだめて搦手もまはるらん。とりこめられてはかなふまじ。ここをばひいて、尾張河洲俣をふせげや」とて、とる物もとりあへず、我さきにとぞ落ちゆきける。

☆東部地区

（『平家物語』小学館日本古典文学全集）

【意味】

大将軍権亮少将維盛は、東国をよく知っている者として、長井の別当実盛を呼んで、「やあ実盛、お前くらいの強い弓を射る者は、八か国の中にどのくらいいるか」とお尋ねになると、斎藤別当があざ笑って申したことには、「とおっしゃいますと、あなたは実盛を大きい矢を使う者と思っていらっしゃるのですか。私はたった十三束の矢を使っているだけです。実盛ほどに射ることができます者は、関東八か国にいくらでもおります。大弓の使い手と言われるほどの者で、十五束に満たぬ矢を引く者はございません。弓の強さも屈強の者が五、六人がかりで張るほどです。このような強弓使いが射ます時は、鎧を二、三領も重ねて簡単に射通します。また、大名一人と言いますなら、軍勢が少ないとしても、五百騎以下のことはありません。馬に乗ったなら、落ちることなどない。道の悪い所を走っても、馬を倒したりしない。合戦ではまた、親が討たれようが子が討たれようが、誰かが死ねば、その屍を乗り越え、乗り越えて戦うのです。西国の合戦というと、親が討たれてしまうと供養をし、忌中の期間が過ぎてから押し寄せ、子が討たれてしまうと、その悲嘆のため寄せるのをやめます。兵糧米がなくなると、春に田を作って、秋に収穫してから寄せ、夏は暑いといい、冬は寒いといって嫌います。東国では全くそのようなことはありません。甲斐、信濃の源氏共が、土地の事情をよく知っています。富士の裾から、背面にまわりましょう。このように申しますと、あなたをおびえさせ申し上げようとしているようですが、そう思って申すのではありません。合戦は軍勢で決まるのではなく、はかりごとで決まると言い伝えています。実盛は今度の合戦で生き延びて、もう一度都へ参れようとも思っておりません」と申したので、平家の兵たちはこれを聞いて、皆ふるえておののきあった。

そのうちに十月二十三日となった。明日は源氏と平氏が富士川で矢合わせをすると決めていたのだが、夜になって平家の方から、源氏の陣を見わたすと、伊豆、駿河の人民百姓たちが、合戦を恐れて、ある者は野へ逃げ山に隠れ、ある者は船に乗って、海・川に浮かんで、煮炊きする火が見えたのを、平家の兵たちは、「ああ、たいへんな数の源氏の陣の遠火の多さよ。なるほど本当に野も山も、海も川も、皆敵でいっぱいであることよ。どうしようか」とあわてた。

その夜の夜半頃に、富士の沼に、たくさん群がっていた水鳥どもが、何に驚いたのであろうか。ただ一時にばっと飛び立った羽音が、大風か雷のように聞こえたので、平家の兵士たちは「そら、源氏の大群がおしよせてきたぞ。斎藤別当が申したように、きっと背後にもまわっていよう。取り囲まれてはかなうまい。ここを退去して、尾張川洲俣を防げ」といって、とる物もとりあえず、我先にと落ちて行った。

『曽我物語』は源頼朝の富士の巻狩りの際に、曽我十郎祐成・五郎時致兄弟が、父の敵工藤祐経を討った仇討ち物語。本文は、兄弟が三島大明神に仇討ち成就を祈念する場面である。

駒を速めて行くほどに、伊豆の国府に着きぬ。明神の御前にて笠懸七番づつ射奉りて、御拝殿に並み居て祈請しける。「仰ぎて願はくは、大明神、思ふ敵を討たせ賜べ。伏して乞ふ、王子・眷属、祐経が首を我らが手に懸けさせ給へ。今日、出でて後、二度、山より東へ返し給ふな」と心胆を砕きて祈りける。十郎、

千早振る神の斎垣に露かけて祈る心に月を宿さん

五郎、念珠押し揉みて、

千早振る神風早く音冴えて嘆く闇路の雲を晴らさん

（『曽我物語』小学館新編日本古典文学全集）　☆伊豆地区

【意味】

馬の足を速めて行くうちに、伊豆の国府に着いた。三島明神の御前で笠懸を七番ずつ奉納して、御拝殿に並んで座って祈願した。「お願い申し上げますことには、大明神よ、狙う敵を討たせてください。平伏してお願いします。王子神、眷属神、祐経の首を我らの手に掛けさせてください。今日、出発してから、二度と箱根の山から東にお帰しになるな」と心を込めて祈った。十郎は、

三島明神の神域を囲む垣根に露のように涙を流して祈る心に応えて、明神は願いを叶えてくれるでしょう

＊「千早振る」は「神」を導く枕詞

五郎は、数珠を強く揉んで、

神風は早くも澄んだ音を立てて吹き渡り、嘆きに沈む心の闇路の雲を吹き払ってくれるでしょう

○日　記（紀　行）

『十六夜日記』の作者阿仏尼は、正妻の子と我が子との間に起きた相続争いの訴訟のため、鎌倉へ旅をした。次に挙げるのは、その道中に浜松の地を訪れた場面である。浜松は阿仏尼が少女時代を過ごした土地でもある。現在でも使われている地名が見受けられる。

今夜は、引馬の宿にとどまる。この所の大方の名は浜松とぞ言ひし。親しと言ひしばかりの人々なども住む所なり。住み来し人の面影も、さまざま思い出でられて、又めぐりあひて見つる命の程も返す返すあはれなり。

浜松のかはらぬ陰を尋ね来て　見し人なみに昔をぞとふ

その世の見し人の子、孫など、呼び出でてあひしらふ。

廿三日、天中の渡りといふ。舟に乗るに、西行が昔も思ひ出でられて心細し。組み合せたる舟ただ一つにて、多くの人の往来に、さしかへる、ひまもなし。

水の泡のうき世を渡る程を見よ　早瀬の瀬々に棹も休めず

今夜は遠江、見附の国府という所にとどまる。里荒れて物恐ろし。傍らに水の江あり。

誰か来て見附の里と聞くからに　いとど旅寝ぞ空恐ろしき　☆　西部地区

（『中世日記紀行集』小学館日本古典文学全集）

【意味】

今夜は、引馬の宿という所に泊まる。このあたり一帯の名を浜松と言った。親しいというのも名ばかりの人々が住む所である。この地に住んでいた人の面影も、色々と思い出されて、（昔住んでいた土地を）再び目にした自分の命のことなども、本当にしみじみと思われる。

浜松の昔と変わらない面影を尋ねてきて、昔会った人はもういないので波に昔のことを尋ねることだ

＊「浜松」に「浜辺の松」を、「なみに」に「無みに」と「波に」を掛けている。

昔、会った人の子ども、孫などを宿へ呼び寄せて相手をした。

二十三日、天中の渡りという。その渡し場で舟に乗ると、西行の昔のこと（西行がこの渡し場でひどい目にあったこと）が思い出されて心細い。木を組み合わせた舟がたった一そうあるだけで、多くの人が行き来するので、棹をさしかえて舟を出すひまもない。

水の泡のようにはかないこの世を渡る人の様子を見なさい。まるでこの急流に棹を休める暇がないのと同じようだ（たいそうせわしないことよ）

今夜は遠江、見附の国府という所に泊まる。この村は荒れていて薄気味悪い。そばには沼もある。

誰かが来て見つけるという名前の里と聞いただけで、ますます旅寝が恐ろしいことよ

＊「見附」に「見つける」を掛けている。

○滑稽本

『東海道中膝栗毛』は、主人公の弥次郎兵衛と喜多八が数々の失敗をしながら、東海道を旅する道中記。次に挙げるのは、岡部の宿での一場面であり、嶋田、藤枝といった地名も見受けられる。作者の十返舎一九は駿河の国（現在の静岡）に生まれた。

それより宇津の山にさしかゝりたるに、雨は次第に篠を乱し、蔦のほそ道心ぼそくも、杖をちからに十團子の茶屋のちかくになりて、弥次郎おもはず、さかみちにすべりころびければ

降りしきる雨やあられの十だんごころげて腰をうつ山のみち

おかべのしゅくのやど引まちうけて「おとまりでございますか　弥二「イヤわつちらァけふ、川をこさにやァならねへやど引「大井川はとまりました　北八「なむさん、川がつかへやしたか　やど引「さやうでございます。さきへお出なさっても、お大名が五ッかしら、嶋田と藤枝におとまりでございますから、あなた方のおやどはござりませぬ。先岡部へおとまりなさいませ　弥二「そんなら、そふしよふか

北八「おめへなにやだ　やど引「相良屋と申ます。すぐにお供いたしませう

打つれていそぎゆくほとに、はやくも大寺かわらのさトか道をうちこへて、おかべのしゆくにいたりければ

豆腐なるおかべの宿につきてげりあしに出来たる豆をつぶして

先この駅にやどをとりて、川のあくまでしばらくたびのつかれをぞやすめける

☆中部地区

（『東海道中膝栗毛』岩波日本古典文学大系）

【意味】

そこから宇津の山にさしかかったころ、雨はだんだん強くなって、笹の葉を乱すほどになった。蔦の細道は心細いけれども、杖に力を借りてようやく十団子の茶屋の近くになった所で、弥次郎は思わず、坂道ですべってころんでしまった。

雨あられと降りしきるまるで十団子のような雨のせいで、思わずころんで腰を打ってしまった宇津の山道であるよ

＊十団子…宇津の山の名物。小豆ほどの大きさの団子を十個を一連につなげてある。

「腰を打つ」に「宇津の山」を掛けている。

岡部の宿では宿引きが待ち受けていて「お泊りでいらっしゃいますか」と言うのに、弥二が「いやあ、おれらは今日、川を越さなきゃならないんだ」と答えると、宿引きは「大井川は川止めになりましたよ」と言う。北八が「なんてことだ、川が渡れませんか」と聞くと、宿引きは「そうなんでございます。もしこの先にいらっしゃっても、大名が五人(行列を連れて)嶋田と藤枝にお泊りですから、あなた方のお宿はございませんよ。ともかく岡部にお泊りなさいませ」と答える。弥二が「そんなら、そうしようか」言うので、北八が「おまえは何という店だ」とたずねと「相良屋と申します。すぐにお供いたしましょう」と宿引きは言う。急いで歩いて行くと、早くも大きな寺の瓦が見える坂道を越えて、岡部の宿に到着したので、

豆腐という名の（岡部の）宿にようやく着いたことよ。足にできた、豆をつぶしながら。

＊「おかべ」は豆腐の女ことば。

豆腐を作るための「豆をつぶす」に足にできた「豆をつぶす」を掛ける。

ともかくこの宿場に宿をとって、川止めが終わるまでしばらく旅の疲れを休めたことだ。

○紀　行

『野ざらし紀行』は、松尾芭蕉が江戸を立って東海道を上り、郷里伊賀や近畿諸国を巡って江戸に帰るまでの紀行。本文は、雨降る中の大井川を越え、馬に揺られつつ未明に到着した小夜の中山が描かれた箇所である。

大井川越る日は、終日、雨振ければ、

秋の日の雨江戸に指おらん大井川　　ちり

馬上吟

道のべの木槿は馬にくはれけり

二十日余の月、かすかに見えて、山の根際いとくらきに、馬上に鞭をたれて、数里いまだ鶏鳴ならず。杜牧が早行の残夢、小夜の中山に至りて忽驚く。

馬に寝て残夢月遠し茶のけぶり

☆中部・西部地区

（『松尾芭蕉集』小学館日本古典文学全集）

【意味】
大井川を越える日は、一日、雨が降っていたので、
この秋の雨つづきに、江戸では指折り数えて、今日あたりは大井川の川越しの日だとうわさしあっていることだろう。

馬の上で詠んだ句　　ちり

道ばたにむくげが咲いている。自分の乗った馬は、その花をひょいと食べてしまった。
二十日過ぎの欠け始めた月が、未明の空にかすかに見えるが、山の麓のあたりは大層暗い中を、馬上に鞭を垂れたまま、馬の歩むにまかせて山路を数里たどったが、いまだ暁を告げる鶏の声も聞こえない。杜牧が「早行」という詩の中で言う、名残の夢心地で行くうちに、小夜の中山に到着して、はっと目が覚めた。
馬上にうとうとと名残の夢を見続けて行くうちに、ふと気づくと、月は遠く山のはるかかなたにかかって、家々からは茶の香のする煙が立ち上っていることよ

○和　歌

『万葉集』は奈良時代中期から後期に成立した日本最古にして最大の全二十巻からなる歌集である。天皇から庶民に至る様々階層の人々が読んだ歌を大伴家持がまとめたといわれている。歌体も長歌・短歌・旋頭歌・仏足石歌体など様々である。

山部宿祢赤人、富士山を望める歌一首と短歌

天地の　分れし時ゆ　神さびて　高く貴き　駿河なる　布士の高嶺を　天の原　振りさけ見れば　渡る日の　影も隠ひ　照る月の　光も見えず　白雲も　い行きはばかり　時じくぞ　雪は降りける　語り継ぎ　言ひ継ぎ行かむ　不尽の高嶺は　　（巻三、三一七）

反　歌

田子の浦ゆ　うち出でて見れば　真白にぞ　富士の高嶺に　雪は降りける　　（巻三、三一八）

☆東部

【意味】
山部赤人が富士山を望んで詠んだ歌一首と短歌
天地が分かれた世界のはじめから、神々しく高く貴い駿河にある富士の高い峰を、広々とした大空はるかに振り仰いで見ると、（富士山があるために）空を渡る日の光も見えなくなり、白雲も行きかねて、時節に関係なく雪が降っている。語り継ぎ、言い継いでいこう。富士の高い峰のことを。

反　歌

田子の浦を通って出てみると、はるか遠くに、真っ白に富士の高い峰に雪が降っていることだ。
＊反歌…長歌の後に詠み添えて、長歌の意を反復・補足・要約する短歌

春日蔵首老

焼津辺に　我が行きしかば　駿河なる　阿倍の市道に逢ひし児らはも

（巻三、二八四）

☆中部

【意味】

焼津のあたりを歩いた時、駿河にある安倍の市への道で出会った娘よ。

（岩波書店『日本古典文学大系４』「萬万葉集一」）

駿河國の歌

天の原　富士の柴山　木の暗の　時移りなば　逢はずかもあらむ

（巻十四、三三五五）

☆東部

【意味】

富士山の柴の生えた山の、木陰の暗がりに今日の夕方の約束の時が過ぎて行ったら、二度と逢うことができないだろうな。

＊木の暗…「この夕暮れ」と「木陰の暗がり」を掛けている。

駿河國の歌

駿河の海　磯邊に生ふる　濱つづら　汝をたのみ　母に違ひぬ

（巻十四、三三五九）

☆東部

【意味】

駿河の海の浜辺に生えているつる草のように長い間、あなたをたのみにしてわたしは母と仲違いをしてしまいました。

相模國の歌

足柄の　箱根の山に　粟蒔きて　實とはなれるを　逢はなくもあやし

（巻十四、三三六四）

☆東部

【意味】

足柄の箱根の山に粟を蒔いて実ったように、わたしの恋は成就したのに、今日会えないのはおかしいことだ。

遠江國の歌

遠江　引佐細江の澪標　吾を頼めて　あさましものを

（巻十四、三四二九）

☆西部

【意味】

遠江の引佐細江の澪標のように頼みにさせておきながら、（本当は浅い心であったのに）。

＊遠江…滋賀県の琵琶湖を近い淡海（近江）というのに対して、静岡県の浜名湖を遠い淡海（遠江）といった。

＊澪標…通行する船に、通りやすい深い水脈を知らせるために立てた杭。

駿河國の歌

志太の浦を　朝漕ぐ船は　因無しに　漕ぐらめかもよ　因こさるらめ

（巻十四、三四三〇）

☆中部

【意味】

志太の浦を朝漕いでいる船は、わけもなしに漕いでいるのだろうか。そんなことはあるまい。わけがあるだろうに。

＊志太の浦…静岡県志太郡。駿河国西端。

（岩波書店『日本古典文学大系６』「萬万葉集三」）

主張丁麁玉郡の若倭部身麿

わが妻は　いたく恋ひらし　飲む水に　影さへ見えて　世に忘られず　（巻二十、四三二二）　☆西部

【意味】
わたしの妻は、わたしのことをたいそう恋しく思っているらしい。飲もうとした水に妻の姿までも見えて、少しも忘れられない。
＊主張丁麁玉郡の若倭部身麿…遠江国麁玉郡（浜北あたり）の防人。主張丁とは、郡の帳簿の記録をする役人に使われるために徴用された男性のこと。

佐野郡の丈部黒当

父母も　花にもがもや　草枕　旅は行くとも　捧ごて行かむ　（巻二十、四三二五）　☆西部

【意味】
父も母も花だったらなあ。防人として筑紫へ行くときにも、捧げもって行くのに。
＊佐野郡の丈部黒当…遠江国佐野郡（掛川市北部）の防人。

長下郡の物部古麿

わが妻も　繪に描きとらむ　暇もが　旅行く吾は　見つつしのはむ　（巻二十、四三二七）　☆西部

【意味】
私の妻を絵に描き取る暇がほしい。旅に行く私はそれを見て思い慕おうものを。
＊長下郡の物部…今の浜松市・磐田市あたりの防人の輸送をつかさどる役。

大伴宿禰家持

防人の　堀江漕ぎ出る　伊豆手舟　楫取る間なく　戀は繁けむ　（巻二十、四三三六）　☆伊豆

【意味】
防人が難波の堀江を漕ぎ出て行く伊豆手舟の櫓を漕ぐ間の休みないように、いつも故郷への恋しさは止むときがないことであろう。
＊伊豆手舟…伊豆で作った舟。

上丁有度部牛麿

水鳥の　発ちの急ぎに　父母に　物言ず来にて　今ぞ悔しき　（巻二十、四三三七）　☆中部

【意味】
水鳥が飛び立つ時のようにあわただしく出発してしまい、父や母にきちんとした挨拶もせずに来てしまったことが、今になって悔やまれるよ
＊上丁有度部牛麿…駿河の国の防人（防人とは東国から九州北部の警護に当たった兵士のこと）。

丈部稲麿

父母が　頭かき撫で　幸くあれて　いひし言葉ぜ　忘れかねつる　（巻二十、四三四六）

☆中部

【意味】

父や母が、私の頭をかき撫でて無事でいるようにといった言葉が忘れられない。

＊あれて・言葉（けとば）…方言「あれと」「ことば」。

（岩波書店『日本古典文学大系７』「萬葉集四」）

『古今和歌集』は平安時代前期に成立した最初の勅撰集である。天皇に命じられた四人の選者が、万葉集から後の一四〇年間の名歌を集め、約一一〇〇首、全二十巻にまとめた。巻一から順に「春」「夏」：「離別」「恋」など主題別の構成になっており、技巧を用いた理知的で繊細な歌風が特色である。

読人しらず

駿河なる　田子の浦浪　たゝぬ日は　あれども君を　恋ひぬ日はなし　（巻十一、恋一、四八九）

☆東部

【意味】

駿河にある田子の浦に波が立たない日はありますが、あなたを恋しく思わない日はありません。

＊田子の浦…古来、東海道屈指の景勝地。古くは富士川西岸、蒲原・由比・興津の海岸。

＊読人しらず…歌集で作者が不明の場合に記載する語。作者を明らかにしにくい事情のある場合にも用いた。

紀友則

あづま路の　小夜の中山　なか〳〵に　何しか人を　思そめけむ　（巻十二、恋二、五九四）

☆西部

【意味】

東国への道にある小夜の中山まで来たら、なぜかかえってあの人を恋しく想うようになってしまった。

＊紀友則…『古今和歌集』の選者の一人で三十六歌仙の一人。

＊小夜の中山…静岡県掛川市の日坂峠と島田市金谷との間にある東海道の坂道。曲折し、左右に深い谷がある。第二句目までが「なかなか」を導き出す序詞になっている。

（岩波書店『新　日本古典文学大系５』「古今和歌集」）

『新古今和歌集』は鎌倉時代初期に成立した。天皇に命じられて藤原定家ら六人が選者となり、千九百八十首を二十巻にまとめた。余情を重んじ、非現実の美を求める歌風で、本歌取り、掛詞、体言止めなど修辞を複雑に用いた技巧的な表現が多く見られる。

越前

沖つ風　夜寒になれや　田子の浦の　海人の藻塩火　たきまさるらん（巻十七、雑中、一六一〇）

☆東部

【意味】

沖を吹く風が、秋になって寒く感じられるようになっただろうよ。田子の浦の漁師の焚く藻塩火は今ごろ一層あかあかともえさかっているだろう。

＊越前…後鳥羽院の皇女である嘉陽門院に仕えた。

＊藻塩火…海草からとる塩。海藻に海水をかけて塩分を含ませ、これを焼いて水に溶かし、煮詰めてつくる。その海藻を焼くときの火。

藤原家隆

富士のねの　煙もなほぞ　立ちのぼる　上なきものは　思ひなりけり（巻十二、恋二、一一三二）

☆東部

【意味】

富士山の頂上には煙が依然として立ちのぼっている。際限なく立ちのぼるのはわたしの燃える思いなのだろうよ。

＊「思ひ」の「ひ」には「火」がかけられている。

藤原定家朝臣

事とへよ　思ひおきつの　濱ちどり　なく〳〵出でし　跡の月かげ（巻十、羇旅、九三四）

☆中部

【意味】

浜千鳥の鳴く浜辺で、後に残った人は、月に尋ねておくれ。思いを残しながら泣く泣く都を出てきた私のことを。

＊濱ちどり…この句で、前の一句・二句と後の三句・四句を結び付けている。

藤原雅經

ふる郷の　けふの面影　さそひこと　月にぞ契る　さよの中山（巻十、羇旅、九四〇）

☆西部

【意味】

故郷の今日の月の様子を、誘うようにしてここで見せておくれと、月に頼んだよ。小夜の中山で。

有家業清

岩がねの　床に嵐をかたしきて　ひとりやねなん　さ夜の中山（巻十、羇旅、九六二）

☆西部

【意味】

旅に出て岩を床にして、激しい山風の中に袖を片敷いて寝るのだろうか、小夜の中山で。

＊かたしきて…昔は衣を敷いてねたことから、片方の袖だけ敷くのは、一人きりで寝るということを意味する。

故郷に　聞きし嵐の　聲もにず　忘れね人を　さやの中やま　（巻十、羇旅、九五四）

☆西部

【意味】

旅に出て聞く山風の音は、都で聞いたのには似ても似つかないくらい寂しさを感じさせる。このように都も遠ざかったのだから、都のあの人のことなど忘れてしまえ。そう思ってもなかなか忘れられないものだ。

家隆朝臣

旅ねする　夢ぢはゆるせ　うつの山　關とはきかず　もる人もなし　（巻十、羇旅、九八一）

☆中部

【意味】

旅寝の夢の中に通ってくる人は許しておくれ。宇津の山よ。ここには関があるとも聞かず、その上また、見張り番をする人もいないのだから。

＊『伊勢物語』の東下りの段にある「駿河なる　うつの山辺の　うつつにも　夢にも人に　逢はぬなりけり」が本歌。「うつ」には地名の「宇津」と現実を意味する「うつつ（現）」が掛けられている。

定家朝臣

都にも　いまや衣を　うつの山　夕霜はらふ　つたのした道　（巻十、羇旅、九八二）

☆中部

【意味】

都では今時分、冬の到来に備えて砧で衣を打っているだろう。わたしはこの宇津の山辺で夕方降りた霜を払いながら蔦の下道を歩いているよ。

＊「衣をうつ」はつやを出したり、柔らかくするために布を砧で打つこと。冬着の準備で秋の夜長の仕事として行う。「うつ」には「宇津谷峠」の「宇津」と「衣を打つ」の「打つ」がかけられている。

＊「つたのした道」は「蔦の細道」とも言い、静岡市丸子から宇津谷峠に通ずる国道の南方にある小道。

西行法師

年たけて　又こゆべしと　思ひきや　いのちなりけり　さ夜の中山　（巻十、羇旅、九八七）

☆西部

【意味】

年老いてからまた、この小夜の中山を越えることになるだろうと思ったであろうか。思わなかったことよ。再び越えているのも命あって生きていたからである。

（岩波書店『日本古典文学大系28』「新古今和歌集」）

『金槐和歌集』は鎌倉初期、源実朝の歌を集めた歌集で、鎌倉右大臣歌集とも呼ばれている。実朝二十二歳までの歌集で、歌数は六六三首。所収歌の九割が古今調・新古今調の本歌取りを主とした歌であるが、男性的な万葉調の和歌に優れている。

見わたせば　雲井はるかに　雪しろし　富士の高根の　あけぼのの空　☆東部

【意味】
はるか遠くを眺めると、雲のある空に雪が白く見える。夜が明けようとするころの富士の峰の美しさだよ。

富士のねの　煙も空に　立つものを　などか思ひの　下にもゆらむ　☆東部

【意味】
富士の煙は空に向かって立ちのぼってゆくのに、どうして、同じ「火」という名のつく「思ひ」は上に上らず、心の下に燃えるのであろうか。
＊「思ひ」の「ひ」には「火」がかけられている。

田子の浦の　荒磯の玉藻　波の上に　うきてたゆたふ　戀もする哉　☆東部

【意味】
田子の浦の波が荒く打ち寄せる海岸の美しい藻が、波の上に浮いてただようような、はかない恋をしているよ。

東路の　さやの中山　こえて往なば　いとゞ都や　遠ざかりなむ　☆西部

【意味】
東国に至る道すじにある小夜の中山を越えていくと、いよいよ都は遠ざかってしまうであろう。

箱根路を　わが越えくれば伊豆の海や沖の小島に波のよるみゆ　☆伊豆

【意味】
箱根への道を越えてくると、伊豆の海の沖の小島に波が寄せ来るのが見えるよ。
＊沖の小島…伊豆の初島。

都人に　夢にもゆかむ　便あらば　宇津の山風　吹もつたへよ　☆中部

【意味】
都に向けて、夢にでも行きたい。ついでがあるならば、宇津の山風よ、吹いて伝えておくれ。
＊「都人に」…これは「都へに」として解釈する。
＊「するがなる　宇津の山べの　うつつにも　夢にも人に　あはぬなりけり」が本歌。
（岩波書店『日本古典文学大系29』「山家集　金槐和歌集」）

○俳　諧

連歌から独立した俳諧は、やがて松尾芭蕉によって芸術の分野にまで高められた。ここでは旅の道中県内で詠んだ句を挙げてある。

芭蕉

五月雨の　空吹きおとせ　大井川　　☆中部

【意味】
島田の宿で大井川を渡ろうとしているが、五月雨の日が続きなかなか渡ることができない。大井川よ、いっそのことその勢いのある流れでこの暗い雨雲の空を吹き落とし、押し流しておくれ。

小夜中山にて

命なり　わずかの笠の　下涼ミ　　☆西部

【意味】
日差しの強い暑さの旅の途中、頭にかぶったわずかな笠の下の陰を、命と頼んで涼むことだ。

＊「命なり」…西行の「年たけて　又こゆべしと　思ひきや　いのちなりけり　さ夜の中山」から得た表現の工夫。

駿河路や　花橘も　茶の匂ひ　　☆中部

【意味】
駿河路を行く季節は今花橘の香る初夏だが、ここでは茶の香りがさらにかぐわしいよ

（岩波書店『日本古典文学大系45』「芭蕉句集」）

○短歌

北原白秋は福岡県出身の詩人、歌人。「ちゃっきり節」の作詞者であり、静岡県で多くの短歌、民謡を作った。歌碑も多い。

歌集「海阪」　　北原白秋

不二大観

雪しろくいとど晴れたれ御殿場の真上の不二は低く厚く見ゆ　　☆東部

浜名の鴨

遠つあふみ浜名のみ湖冬ちかし真鴨翔れり北の昏きに　　☆西部

（岩波書店『岩波文庫　北原白秋歌集』）

若山牧水は宮崎県出身の歌人。大正九年から亡くなるまで沼津に住んだ。伊豆の温暖な気候と温泉を愛し、幾度となく訪れて多くの短歌を作り、紀行・随筆を書いた。東部地区には歌碑も多い。

歌集「渓谷集」　若山牧水

伊豆の春

一月元旦加藤東籬君と共に駿河河津なる加納川の川口に宿る。

とほく来て寝ぬるこの宿静けくて夜のふけゆけば川の音きこゆ

土肥より汽船にて沼津へ渡らむとし、戸田の港口にて富士を見る

伊豆の国戸田の入江を船出すとはしなく見たれ富士の高嶺を

（筑摩書房『現代短歌全集　第四巻』）　☆伊豆

○俳句

正岡子規は愛媛県出身の俳人、歌人。俳句・短歌の革新運動を進めた。舞阪町弁天島に句碑がある。

寒山落木　正岡子規

明治二十二年

袋井

冬枯の中に家居や村一つ

明治二十八年　秋　天の川

天の川浜名の橋の十文字

（講談社『子規全集第一巻、第三巻』）　☆西部

河東碧梧桐は愛媛県出身の俳人。高浜虚子と共に子規門の双璧と称された。新傾向俳句運動を展開した。

碧梧桐句集　河東碧梧桐

冬　時候

伊豆の海や大島寒く横たはる

冬　植物

この道の富士になり行く芒（すすき）かな　（河出書房新社『現代俳句集成第二巻』）　☆東部

高浜虚子（たかはまきょし）は愛媛県出身の俳人。修善寺に知人の営む宿があり、しばしば訪れていた。富士宮市、伊豆の国市、伊東市に句碑がある。

六百句時代　高浜虚子

昭和十六年

三月二十四日。修善寺新井屋主人、相原沐芳の需（もとめ）に応じて、その梅林に建てたる句碑

北に富士南に我が家梅の花

七百五十句

白糸の瀧の陰晴常ならず　☆東部

（毎日新聞社『定本　高浜虚子全集　第二巻、第四巻』※原文の旧字体は新字体に改めた。）